



TITLE:

京大広報 No. 136

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 136. 京大広報 1977, 136: 615-618

ISSUE DATE:

1977-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209555>

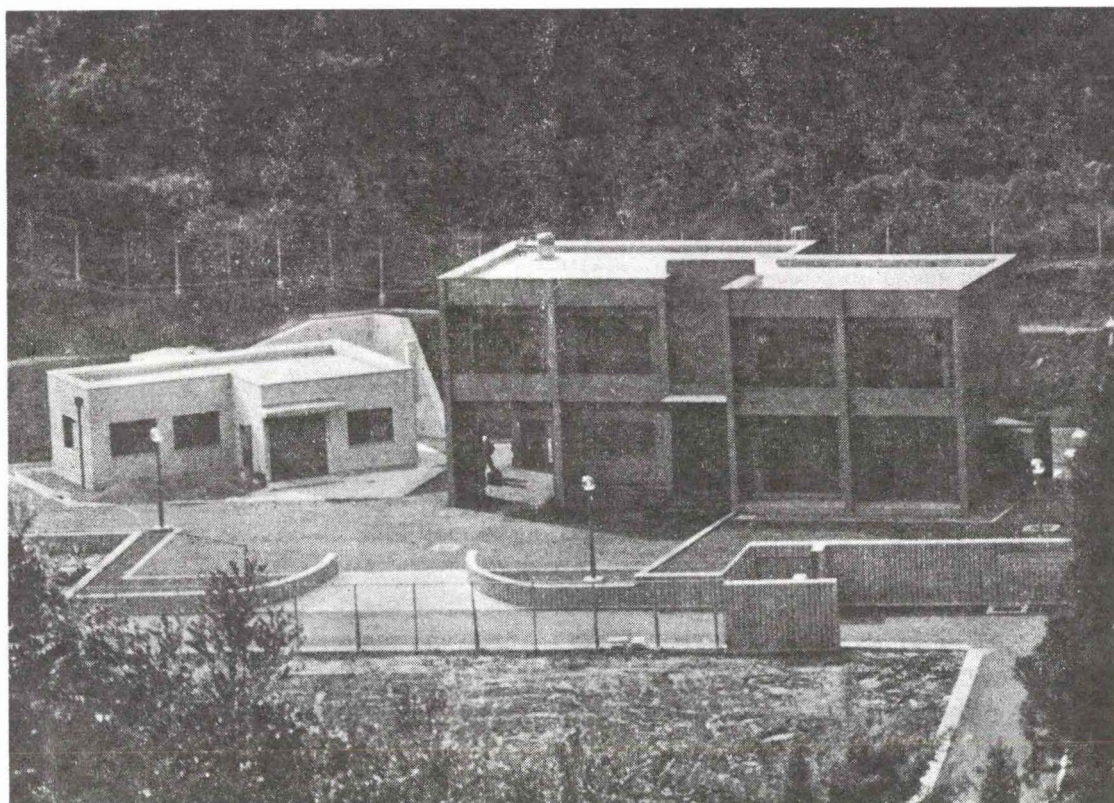
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 136

京都大学広報委員会



防災研究所附属・宮崎地殻変動観測所全景

(右：観測所本館、左：観測室。ここから背後の山へ延約290mの観測用坑道が掘られており、観測計器が設置されている。—関連記事3ページ〈部局の動き〉—)

## 目 次

2月25日、2月26日の掲示について……………2

入学試験の実施にあたってとられた  
措置および経過……………2

〈随 想〉  
わたくしの学生時代  
名誉教授 小島昌太郎……………3

観測研究を開始した宮崎地殻変動観測所……………3

〈紹 介〉  
経済研究所……………4

日 誌……………4

## ＜大学の動き＞

### 2月25日、2月26日の掲示について

最近、一部集団により総長室の窓ガラス等の破壊が行なわれ、更には本部二階東部等が占拠される事態が発生した。

これらの事態にかんがみ、総長は次の掲示を出した。

#### (掲示第1号)

数日来、総長室ならびにその周辺事務室の器物破壊がなされているのは、極めて遺憾である。

このような行為に対して厳重に警告するとともに、良識ある行動を強く要望する。

昭和52年2月25日

京都大学総長 岡 本 道 雄

#### (掲示第2号)

現在、本部二階東部をはじめ、学内各所において、施設の占拠が行われているのは甚だ遺憾である。

大学としてこのような不法な行為を容認することはできない。

ただちに占拠を解くよう厳重に警告する。

昭和52年2月26日

京都大学総長 岡 本 道 雄

### 入学試験の実施にあたってとられた措置および経過

本学において、さる3月3日から5日までの3日間にわたり行なわれた入学試験の準備と実施のためとられた措置および経過は、以下のとおりである。

1. 2月22日の評議会において、総長は「入学試験の万全を期するため、警備に関しては、場合により警察の援助を要請することもあり得る。ただしその要請は、部局長会議に諮り慎重にとり行ないたい」趣旨のことを述べた承を得、2月28日、総長は部局長会議の同意を得て次の掲示を出した。

#### (掲示第3号)

本学施設を占拠している諸君は、ただちに占拠を解き、当該施設外に退去しなさい。

昭和52年2月28日

京都大学総長 岡 本 道 雄

2. 3月1日、学生らは依然として本部二階東部の占拠を続けるとともに、早暁、本部正門にバリケードを作りこれを閉鎖した。このため学生部長は、午前7時30分から同52分にかけて、ただちに占拠を解き退去するようにとの総長の退去命令を繰返し伝えた。

8時2分に至り、要請により待機していた機

動隊が本部正門前に移動したが、その前後に、占拠中の学生らは退去したため、本学教職員により、正門バリケードの撤去および本部二階東部内のバリケード撤去と室内の整理作業が始められ、8時45分に終了した。

3. 3月2日、入学試験の実施のため、総長は次の掲示を出した。

#### (掲示第4号)

3月3日から5日までの間入学試験実施のため、とくに学内における次の行為を禁じます。

- 一、集会を開くこと。
- 二、マイクを用いて静穏を害すること。
- 三、デモを行うこと。
- 四、その他入学試験を妨害する一切の行為。

昭和52年3月2日

京都大学総長 岡 本 道 雄

#### (掲示第5号)

入学試験を円滑に実施するため、3月3日(木)から3月5日(土)午後1時までの間、本学関係者並びに受験生以外の方の入構を禁止します。

各位の御理解と御協力をお願いします。

昭和52年3月2日

京都大学総長 岡 本 道 雄

4. 入学試験期間中、次のような門の開閉の変更および車両制限が行なわれた。

#### (1) 門の開閉の変更

入学試験実施期間中、本部構内東門を閉鎖し、教養部構内東門は受験生退出のため、試験終了後約30分臨時に開門する。

#### (2) 車両制限

○ 入学試験実施期間中の3月3日午前7時から5日正午まで、本部、教養部、医学部および薬学部の各構内に出入する車両は、本学関係者の車および本学にやむを得ない用務のある車両以外入構禁止とする。

○ 本部および教養部構内へ出入する車両の通門は、次のとおりとする。

#### (本部構内)

午前7時から午後6時まで……入構は北門、出構は裏門

午後6時以降……………出入構ともに正門(教養部構内)

午前7時から午後6時まで…出入構ともに西門

5. 3月3日から始まった入学試験は、3月5日、前夜来の降雪による交通渋滞を勘案し、午前9時30分以降午前10時までの遅刻者は、9時30分から起算して遅れた時間だけ終了時間を延長する特別措置がとられたほかは、予定どおり終了した。





クリート巻立の水平坑道（高さ・幅各2m、延約260m、高さ・幅各3m、延約22m）と堅坑（直径1.2m、高さ約9m）、合わせて約290mで、坑口には約56m<sup>2</sup>の鉄筋コンクリート造平屋建の観測室がある。観測計器は、坑口から5重の隔離扉で仕切られた約98mの通路坑を経た奥の、直角二等辺三角形を形づくる水平坑道や堅坑の部分に設置されている。計器の主なものは土地の伸縮変化を測定するスーパー・インヴァール棒伸縮計6台、土地の傾斜変化を測定する水管傾斜計3台、水平振子型傾斜計4台で、伸縮変化では10<sup>-9</sup>、傾斜変

化では1/100秒角を検出することができ、また、これらの地殻変動の観測計器の他に、短周期電磁式地震計3成分、長周期電磁式地震計2成分も設置されている。

当観測所は西日本でのこの種地殻変動観測所としては唯一のものであり、ここで得られる観測資料は、今後地震予知研究に大いに貢献するものと期待される。

なお、当観測所の定員は助手1、技官1の2名であり、現在、同一敷地内に2戸の公務員宿舎を建設中である。（防災研究所）

## < 紹 介 >

### 経 済 研 究 所

産業経済に関する総合的研究を目的として、経済研究所が京都大学に附置されたのは、昭和37年（1962年）4月のことであった。当初は10研究部門を3ケ年で完成する構想であったが（後に6部門に計画を縮少）、発足時点で設置されたのは産業構造部門、比較産業部門の2部門であった。また創設当初は、事務部は本部構内、研究室は西部構内の一室というように分散しており、このような研究・管理・運営上の不備な状態はその後しばらく続いた。しかし昭和40年5月に地上3階地下1階の本館および3層の書庫が竣工し、経済研究所の物理的環境はここによりやく整ったのである。さらにその後、地域経済、資源経済、計画経済および産業統計の諸部門の増設が実現し、当初計画の6研究部門構成は昭和41年4月に完成した。経済研究所の運営は今日までこの6部門をもってなされてきたが、環境経済学の理論的・実証的研究を課題とする環境経済研究部門の増設が新たに計画されている。

さて経済研究所では、所員各自の個人研究プロジェクトと相並び幾つかの共同研究プロジェクト

が研究活動の中核に置かれており、他大学の研究者の参加も得て産業経済の多角的な研究が続けられている。昭和51年度には18の個人研究プロジェクトに加えて11の共同プロジェクトが進行中であって、他大学の同種の研究機関に比して当研究所の特色と充実を示している。共同プロジェクトの例としては次のようなものがある。わが国における大企業の行動と一般集中の問題を研究し産業モデルの開発を目指す「産業組織の理論的・実証的研究」。環境工学研究者との共同作業による「地域環境の評価と制御に関する実証研究」。個人・組織・メカニズムという階層的接近により経済体制の動きを説明しようとする「経済体制論の階層的接近」。4半期マクロ・モデルを発展させて長期経済発展モデルを作成し労働供給と雇用の中・長期的分析におよぶ「日本経済の長期モデルに関する総合的研究」。

個人・共同プロジェクトの成果は英文・和文のディスカッション・ペイパーとして配布され広範な研究者の検討に供され、最終的にはモノグラフあるいは内外の専門誌に研究論文として刊行されている。

### 日 誌 (1977年2月1日～2月28日)

2月1日	評議会	16日	名誉教授称号授与式
1日～2日	防災研究所研究発表講演会	17日	防災研究所附属宮崎地殻変動観測所開所式
3日	スウェーデン国カロリンスカ大学長 Sune Bergström 氏来学	18日	ビルマ国バセイン大学長 U Khin Maung Tint 氏およびマゴエ大学長 U Tin Oo Hlaing 氏来学
7日	大学院制度検討委員会	22日	評議会
8日	評議会	25日	同和問題委員会
〃日	廃棄物処理等専門委員会	〃日	アメリカ合衆国イリノイ大学名誉教授 John Bardeen 氏来学
15日	評議会		
〃日	保健衛生委員会		